浜離宮恩賜庭園の植栽管理に関する考察

Study on the planting management in Hama-rikyu Garden

中島 宏

Hiroshi NAKAJIMA

ものづくり大学非常勤講師

MONOTSUKURI Institute of Technologists

1. 植栽管理	2. 管理方針	3. 管理目標
1. Planting management	2. a management policy	3. management target

「摘要」

本研究の目的は、江戸時代を代表する国指定文化財の浜離宮恩賜庭園を対象に、植栽状況等を踏まえて管理方針を決め、これに基づいて管理目標を提案することである。そのための研究方法として本園の植栽構成等の変遷と植物の生育状況や推移を検証し、植栽管理の方向性について考察した。その結果、樹木や地被の管理水準、樹木の剪定手法、樹林の管理手法の三方面から①外周部の樹林管理は育成型樹林管理手法により緑地環境的管理。②水辺や園路沿いの実生樹木の管理は維持型樹林管理手法により都市公園的管理。③園路沿いの地被の管理は半自然的管理とすることができた。

1、研究の背景と目的

浜離宮恩賜庭園は、文化財保護法による特別名勝および特別史跡に指定され、海の手に位置する面積約 25ha の潮入築山泉水を中心とした回遊式庭園である。

この庭園は、江戸時代に造営されたもので当時の面影を現在までよく伝えており、庭園史上とりわけ貴重な文化財であり、質の高い維持管理を行って、後世に伝えていく必要がある。また、都市公園法による歴史公園でもあり、都民の憩いの場として親しまれている庭園でもある。

この文化財庭園は、時代の変遷と共に庭園の所有者の交代、庭園に対する思想の相違、震災や戦災などの影響、また、最近の周辺環境の改変などによって庭園の構造そのものが変質したため、それに合わせて大きく変化してきた。特に、庭園の構成要素の一つである植物は生き物であり、時間の経過とともにその姿をかえていくため、管理の中で計画性を持ってきめ細かく管理していかなければ、庭園の景観バランスを崩すことにもなりかねない。

つまり、創成期から現在まで庭園の空間構成の変遷や時間の経過に伴って、植物の構成や景観の管理には、著しい変化を惹起しているのである。

庭園を管理していく上で昨今顕在化してきたこのような課題に対して、質の高い植物管理をするためには、管理方針や管理目標を明確にし、管理担当者が、この庭園の作庭意図や変遷等を十分に認識した上で、管理にあたる必要がある。

本論では、直接職務に携わった私自身の経験のなかで、特に、浜離宮恩賜庭園について、植栽の構成や地割の変遷と植物の生育状況や推移を検証し、植栽管理の方向性について考察する。

浜離宮恩賜庭園に関する文献としては、東京都保存文書『濱離宮沿革』、中島卯三郎『濱離宮と某庭園に就て』、小杉雄三『浜離宮庭園』その他絵図や樹木調査等各種報告書などがある。

しかし、歴史的変遷に伴う植栽構成の変化と植物の推移の視点について触れられたものはほとんど見あたらない。したがって、理論づけられた管理方針もなく、経験的に従来の維持管理を踏襲してきたというのが実情である。その経験的な維持管理も、通常の都市公園の維持管理に準じて実施されてきたものといえる。庭園建築や施設の管理については、設計図などがあればこれに基づいて管理することは容易であるが、樹木など庭園植物については、史資料にその詳細が残されているとは限らない。うえ、たとえ絵図や絵画、写真などが残っているとしても、現状の変更や植物の生長などによる変化は否めず、維持管理は決して容易ではない。

文献、絵図、調査資料、報告書などから、歴史的変遷に伴う植栽構成の変遷と、現在の植栽状況とを整合したものがほとんど見あたらない点に着目し、植栽空間構成の変遷と植栽の生育状況・推移を明らかにしながら、管理者の資質に頼るのではなく、客観的に植栽の管理が実施できるような管理の方向性を考察するのが、本研究の目的である。

2、植物の管理方針

(1)時代の設定とゾーニング

浜離宮恩賜庭園周辺は、寛永時代(1624～1644)まで葦のしげる将軍家の鷹狩の場所であった¹⁾²⁾。

第4代将軍家綱はこの地を弟の甲府宰相綱重に与え、綱重はこの葦原を埋め立てて御浜屋敷とよぶ別邸をつくり²⁾³⁾、庭園の造成に伴い植栽されたと推察できる⁴⁾。

将軍家の浜御殿成立時代には田圃が設けられ、池岸や浜近くにはマツが植栽され、海や山水も眺められる静かな風景が造り出されていたことがうかがえる⁴⁾⁵⁾。また、御殿から鴨場の下手方向の景観は、流れや水田、畑が存在し、これらが近景をなし、その背景には築山とカヤ、ヒノキ、マツ類、モミなどの針葉樹を中心とした植栽による遠景が構成されていた⁶⁾。

第8代将軍吉宗の時代には御殿が焼失し、旧御

殿跡に薬園が設けられ³⁾、枳、棗、山楂、芍薬等の薬木薬草が植栽されていた²⁾。

第10代将軍家治時代には、新銭座鴨場が設置され、引堀と引堀との間には畑や山が設けられ、タケが植栽されていた⁷⁾。

第11代将軍家斉の時代には、吉宗時代に焼失した建物などを修復すると共に、新たに各種の茶屋などを設けて種々の催しが行われ、浜御殿が隆盛を極めた時代である²⁾。その当時の植栽の様子が、当時の諸日記から伺い知れるが田圃に庚申堂鴨場が設置され、植物の状況が大きく変わった⁸⁾。

幕末になると、浜御奉行が廃止され、植栽された樹木も自然の状況にまかせていたものといえる²⁾。

明治初年に幕府から新政府に引き渡され、明治3年には宮内省の所管となり、「浜離宮」と改称された⁵⁾。

戦争中、昭和19年の大空襲で歴史的建造物はすべて焼亡し、樹木も焼けこげたが、それでも「東京ではびっくりするほど緑が残っている場所だった⁹⁾。」という記事から、植栽に大きな変化はなかったことがわかる。

浜離宮は、戦争後の昭和20年11月宮内省より東京都に下賜され、「浜離宮恩賜庭園」として一般都民に公開された⁹⁾。

将軍、皇室及び東京都と所有者が変わるにつれて、機能や施設などが著しく変遷した空間は、延遼館区域、花木園、野外卓広場区域、内堀区域である。

このように幾多の変遷を経ながら、昭和23年(1948)12月18日、全域を国指定の文化財として認められ「名勝および史跡」に指定された。その後も復旧整備に努め、昭和27年(1952)11月22日、国指定の文化財として「特別名勝及び特別史跡」に指定されてから今日まで、植栽の基盤となる地割の位置や規模などにおいて大きな変化はみられず、特に池泉回遊式庭園の空間は、江戸時代固有の旧状をほぼ今にとどめている⁴⁾¹⁰⁾。

管理の時代設定は、文化財の指定がなされた時点を原状とみなすのが論理的には妥当である。し

图1 『濱御殿絵図』（国立国会図書館蔵）

図2 『濱御庭内外惣絵図』(天保15年・1844)

図3 浜離宮恩賜庭園現況図(平成19年・2007)

かし、昭和23年12月18日の官報（文部省告示第98号）により、文化財に指定された時の説明内容から考え合わせると、現在利用者が目にすることができる姿の地割は、第11代将軍家斉の時代までさかのぼることができる⁴⁾¹⁰⁾。

それに関する史資料は多くないが、寛政3年（1791）頃の『濱御殿絵図』[図1]や天保15年・弘化元年（1884）の『濱御庭内外惣絵図』[図2]から、次のような3つのタイプに分割し、ゾーニングすることができる⁴⁾¹¹⁾。[図3]

浜御殿北方の内陸側に庭園管理機能を有する建物主体空間のⅠ型をⅠブロックに、浜御殿の南方の海側に修景観賞機能を有する池泉回遊式庭園空間のⅡ型をⅡブロックに、Ⅰ型とⅡ型に挟まれるように配置されたレクリエーション機能を有する鴨場空間のⅢ型をⅢブロックに、それぞれ分けて具体的な管理の方向性について考察する。

（2）管理水準と管理手法

この項では、小杉雄三『浜離宮庭園』に記述されている昭和28年（1953）5月時点での樹木表⁹⁾、昭和58年（1983）6月～11月に行った樹木調査¹²⁾、平成6年（1994）8月～12月に行った樹木調査¹³⁾、事務所の樹木台帳、現場職員のヒヤリング及び現地踏査などに基づき考察した『浜御殿の植物推移に関する考察』¹¹⁾をもとに、管理の方向性を探るために必要な植物の生育状況と推移を検証し、家斉時代と現状とを比較して植物の管理基準を考察する。

なお、平成6年（1994）に行った樹木調査では、庚申堂鴨場を調査区域から除外した。その理由は、関東地方最大規模のカワウの繁殖地であった庚申堂鴨場が、排泄糞や巣材集めなどによる鳥害で樹木の枯損が著しくなったことと、修復工事による伐採が行われたためである。

全園の植栽状況を昭和58年、昭和58年から庚申堂鴨場を除外した区域（以下昭和58年Ⅱとする）と平成6年についてみると、高中木は、11年間に樹種は2種類、率にして約2%増加し、本数は385本、率にして約7%増加しており、樹種、本数ともに増加傾向にある¹¹⁾。

高中木の種別毎の本数の伸びは、昭和28年を100とすると、平成6年には針葉樹が99、常緑樹が153、落葉樹が136となる¹¹⁾。針葉樹の減少傾向は、都内の明治神宮内苑¹⁴⁾、自然教育園¹⁵⁾、小石川後樂園¹⁶⁾にも見られる現象である。

本園では、常緑広葉樹と落葉広葉樹の本数はともに増加しており、これらが樹木本数の増加に寄与しているといえる¹¹⁾。

このままの管理状態で推移すると、高中木の常緑広葉樹の構成比率は近い将来、高木層の50%以上を占めることになるといえよう¹¹⁾。

低木の植栽総面積は、昭和58年Ⅱと平成6年についてみると、11年間に樹種は24種、率にして約60%増加し、面積は26025.2 m²、約10倍に増加している¹¹⁾。

低木の種別毎の増加率は、特殊樹を除くと、最も高いのが常緑広葉樹の約11.3倍、次いで針葉樹の約2.5倍で、最も低いのが落葉広葉樹で約2.0倍になる¹¹⁾。

このことから、低木のすべての種別が大幅に増加し、多様化しているが、特に低木の常緑広葉樹は、大幅に増加する傾向にあり、このままの管理状態で推移すると、近い将来、この常緑広葉樹が低木層の約80%を占めることになるといえよう¹¹⁾。

高中木の常緑広葉樹と落葉広葉樹の比率は、昭和28年、昭和58年、平成6年ともに6:4である。常緑広葉樹と落葉広葉樹と針葉樹の比率は、昭和28年、昭和58年、平成6年ともに5:3:2であり、全国の総合公園や運動公園など都市基幹公園と同じ比率になる¹⁷⁾。全国の文化財庭園など歴史公園は、それらの比率が4:4:2である¹⁷⁾。

このことから、常緑広葉樹の比率が高く、景観的に落葉広葉樹に比べて重厚、荘厳な雰囲気をもつが、反面、暗い感じを利用者に与えているともいえる¹⁷⁾。

高中木の種別毎の本数についてみると、針葉樹の最も多い樹種はクロマツ、常緑広葉樹のそれはタブノキ、落葉広葉樹のそれはエノキである¹¹⁾。そのうち、高木本数1位のタブノキと2位のクロ

マツは、平成6年には2種類で構成比率の約30%を占めており、この庭園の骨格を形成しているといえる¹¹⁾。

高中木の出現本数の構成比率は、平成6年にはタブノキが約20%で最も多く、次いでクロマツが約10%、以下トウネズミモチ、エノキ、アカメガシワが多く、この5種で50%強を占めるほどに際だっている¹¹⁾。

このことから、タブノキと鳥散布型の種子をもつトウネズミモチとアカメガシワの先駆種¹⁸⁾が著しく増加し、自生種の割合が今後一層高くなるものといえよう¹¹⁾。

低木の構成比率についてみると、平成6年にはアオキが約50%で最も多く、次いでヤツデが約15%、第3位のタケ・ササが約14%を占めている¹¹⁾。タブノキ、トウネズミモチ、アカメガシワ等の高木と、低木の約78%を占めているアオキ、ヤツデ、タケ・ササ類の3種とを組合せると、飯泉茂や宮脇昭の種組成からも自然林に近い状態になっているといえる^{19) 20)}。

したがって、樹木の集合体である樹林が、一体となってタブノキの林の景観を形成していくと推測されるため、樹木の管理基準を定めて樹林管理手法により管理していくことが必要となる。

地被の構成比率についてみると、平成6年にはシバが96% (約38,921 m²) を占めている¹¹⁾。

このことから、高中木や低木で見られるように自然化が進む中で、日照を好むシバが植栽されている区域は、樹木 (樹林) の垂直的な感じに対し、水平的な広がりを与える空間であり、現地踏査から見ても管理された植栽空間であるといえる¹¹⁾。

幹周150cm以上の本数についてみると、昭和58年Ⅱに比べて平成6年に増加したのは、タブノキとエノキであり、そのうち、タブノキは全本数の40%以上を占めている¹¹⁾。

このことから、現在園内での最優先占種としてこの庭園の景観を特徴づけているものは、幹周150cm以上の樹木であり、特にタブノキであるといえる¹¹⁾。

昭和58年に比べ平成6年の各大径木の年平均生長量で樹齢を推定してみると、大径木1位のクスノキは明治時代、2位と20位のトウカエデは江戸時代、4位の単幹のタブノキは江戸時代、8位のエノキは明治時代の生まれのようである^{6) 11)}。

形状別樹木の推移についてみると、樹種総体では、幹周89cm以下の樹木が70%強を占める一方、幹周30~59cmより階級が大きくなるにつれ、樹木の本数や構成比率が減少していることから、安定した生育状況で推移していくことが予想できる¹¹⁾。

種別毎の形状別樹木についてみると、昭和58年から平成6年までの11年間に、常緑広葉樹の本数は幹周10~29cmが最も多くなり、稚幼樹が育ってきているといえる¹¹⁾。

落葉広葉樹は最も多いのが幹周10~29cmから幹周30~59cmに生長し、将来への推移に影響も出てくると予測される¹¹⁾。

針葉樹と特殊種は幹周30~59cmが最も多く、いずれも同じようなパターンを保っているといえる¹¹⁾。

図4 高木層構造樹種の推移型図¹¹⁾

高木層を構成する主な樹種の推移についてみると、[図4]のように、大きく鳥散布型の種子を持ち、自然の状況で繁殖する自生種型、葉、花、果実等樹木の色彩を観賞するために維持され、成木は日当たりを好む好陽樹である植栽種型及び自生種や植栽種のうち、環境の影響を著しく受け

やすい後退型に分けることができる¹¹⁾。

したがって、様々な性格を持ちながら生長していく樹種の推移に対応して、庭園利用者や都市環境のために緑豊かで良好な景観を提供していくには、作庭意図を意識しながら樹木等の管理作業を行うことが必要である。

現在、樹木等の管理作業は、理論的な管理でなく作業職員の経験に基づいて通常の都市公園の維持管理に準じて実施されていたり、池の周辺部の景観の中心となる樹木も、園周辺部の園外の建築物の遮蔽機能を有する樹木も、同じような基準、技法や手法で管理がされている事例を見かけることがある²¹⁾。

そこで、樹木や樹林の庭園における位置づけや将来像を踏まえて、管理水準とその具体的な管理手法を定めることとした。

(i) 樹木の管理水準

樹木の管理水準として、公開庭園的管理、都市公園的管理、緑地環境的管理の3つのタイプに大別してみた。

①公開庭園的管理は、樹木の自然的特性を生かしながら伝統的手法である樹芸を駆使して、利用者に良好な庭園の文化遺産や景観等を提供するよう管理すべきもの。②都市公園的管理は、樹木の自然樹形や樹勢に近づけるよう樹芸を必要としないが、継続して手入れ等を行うことによって、樹木や樹林を良好な状態で保ち景観向上につながるよう管理すべきもの。③緑地環境的管理は、樹木の自然の状態で望ましい樹木相互の緑地環境を維持し、適正な樹林地景観を育成するように管理すべきものであるとした。

(ii) 樹木の剪定手法

樹木管理の中心となる剪定手法として、抑制型自然樹形剪定手法、維持型自然樹形剪定手法、育成型自然樹形剪定手法の3つのタイプに大別してみた。

①抑制型自然樹形剪定手法は、基本的にマツのみどり摘みなどを含め切詰め剪定を中心に、切返しと枝抜き剪定を組み合わせる樹形を自然樹形に抑制するためのもの。②維持型自然樹形剪定手

法は、切返し剪定を中心に側枝を調整しながら樹形を自然樹形に維持するためのもの。③育成型自然樹形剪定手法は、不要枝を除去する程度の剪定にとどめ、樹形を大きく自然樹形に育成するためのものであるとした²²⁾。

(iii) 樹林の管理手法

樹木の集合体である樹林の管理手法として、修景型樹林管理手法、維持型樹林管理手法、育成型樹林管理手法の3つのタイプに大別してみた。

①修景型樹林管理手法は、除伐、間伐、枝打ち、下刈り、つる切りなどなどの手法を用いて、利用者に対し快適な美的空間を提供するためのもの。②維持型樹林管理手法は、間伐、下刈り、つる切りなどなどの手法を用いて、遷移する自然林を人工的に制御した樹林環境に維持するためのもの。③育成型樹林管理手法は、枯損木の伐採、周辺環境への影響軽減のための枝打ち、つる切りなどの手法を用いて、自然林に近い状態に樹木を生育させるためのものとした²²⁾。

(iv) 芝生の管理水準

芝生の管理水準として、レベルⅠ、レベルⅡ、レベルⅢの3つのタイプに大別してみた。

①レベルⅠは、単一のシバにより構成され、美観を要求される修景・鑑賞用の芝生地。②レベルⅡは、修景的機能も有するが、食事、休憩等の静的利用にも供される芝生地。③レベルⅢは、広場としてレクリエーション利用に供される芝生地および美観要求度の低い芝生地であるとした²²⁾。

3、植物の管理目標

家斉時代の地割に基づいて、[図5、表1]のように浜御殿の北部に位置する庭園管理機能を有する建物主体空間のⅠブロックをA～Gブロックに、次いで、浜御殿の南部に位置する修景鑑賞機能を有する池泉回遊式庭園空間のⅡブロックをa～fブロックに、そして、それらの中間に位置するレクリエーション機能を有する鴨場空間のⅢブロックをH～Iブロックに¹¹⁾、それぞれ分けて各ブロックごとに植物管理の方向性について考察する。

図5 ブロック分割図¹¹⁾

表1 庭園構成要素の変遷⁴⁾

	I ブロック	II ブロック	III ブロック
	建築主体の空間	池泉回遊式庭園の空間	鴨場の空間
浜御殿時代	大手門、中の御門、御成御門、大番所、火番所、御供溜所、御掃除者御借長屋、御殿番御借長屋、御殿奉行御役宅、勅蔵、御船蔵、船番所、水主長屋等	潮入りの池、中島、小の字島、玄斉島、横堀、塩浜、鳥留、茶屋(中島、松、鷹、燕、海手)、観音堂、八景山、富士見山、樋の口山、御亭山、御亭山腰掛等	新銭座鴨場 庚申堂鴨場
浜離宮時代	延遼館主体の空間	池泉回遊式庭園の空間	鴨場の空間
	大手門、中の御門、御成御門、上記長屋、役宅等建物の取壊、延遼館とその付属庭園、家鴨小屋、鷹部屋、内匠寮詰所等	玄斉島、塩浜の消滅 鳥留の埋め立て 観音堂の撤廃 富士見山の移設等	新銭座鴨場の改修 庚申堂鴨場の中島、引堀の増設、庚申堂の撤廃等
浜離宮恩賜庭園時代	多様な施設の空間	池泉回遊式庭園の空間	鴨場跡の空間
	御門の焼失、中の御門、御成御門の廃止、管理事務所、野外卓広場、芳梅亭、花木園、お花畑、ボタン園、梅林、水上バス発着場等	茶屋の焼失 中島の茶屋の復元等	竹垣で閉鎖、最近開放 庚申堂鴨場はカワウの営巣形成(樹木の枯死、悪臭)、最近修復等
ブロック割	A ~ G ブロック	a ~ f ブロック	H ~ I ブロック

(1) Iブロック

(i) Aブロック

家斉時代には浜御殿の正門入口であった大手門と建物空間であったが、明治2年(1867)延遼館が竣工したときには大手門及びその周辺が延遼館への専用の入口として利用された⁹⁾。

昭和21年(1946)には、大手門の入口から管理事務所を経て庭園への巡回園路を決め、人止柵、仮設便所等を設置し、4月1日から5月末まで無料公開をした²³⁾。

現状をみると、高中木は多い順にタブノキ、トウネズミモチ、クロマツ、低木は多い順にアオキ、ドウダンツツジ、オオムラサキツツジであり、自然と人為とが複合した状態で樹木が生育している¹¹⁾。特に、利用動線上にある通称「三百年の松」は、東京都の保存管理計画に「園内最古と思われる老松の周囲をすかす」とあり、マツ周辺の高中木の伐採、低木の下刈り等のため、地表の乾燥による衰弱が考えられるので、留意する必要がある。

地被の面積で、最も大きいのがシバである¹¹⁾。

このことから、周辺の汐留川沿いの自生種型であるタブノキやトウネズミモチを主体とする樹林や実生樹木のアオキ等の樹林管理は、園外周辺部にある中高層建築物の緩衝的・防災的・遮蔽的機能を意識しながら、育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とする。

入口周辺にある植栽種のクロマツ¹¹⁾管理は、A、B両ブロックが接しているため、両者の景観を意識しながらみどり摘みやもみあげなど抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とする。

植栽種型の通称「三百年の松」と周辺樹木の管理は、本園の主要な景観構成要素であるため、マツの泥巻き養生なども含め、急激な変化を避けるよう計画的・段階的な管理を意識しながら、抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とする。

シバの管理は、景観上もA、Bブロックが接しているため、連続性を持たせるように芝生管理水準Iレベルとする。

(ii) Bブロック

家斉時代には浜御殿の北側の建物主体空間であったが、明治2年(1867)には延遼館とその附属の庭になり外交機能の空間として利用された⁵⁾。しかし、明治23年(1890)には老朽化のため撤去され⁹⁾、クロマツと芝生が植栽された¹¹⁾。

現在では、高中木は多い順にトウネズミモチ、クロマツ、タブノキ、低木は多い順にアオキ、フジ、タケ・ササ類であり、自然と人為とが複合した状態で樹木が生育している¹¹⁾。

地被の面積で、最も大きいのがシバである¹¹⁾。

このことから、周辺の汐留川沿いにある自生種型のタブノキやトウネズミモチを主体とした樹林や実生樹木のアオキ等の樹林¹¹⁾管理は、園外周辺部の中高層建築物の緩衝的・防災的・遮蔽的機能を意識しながら基本的には育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とする。

延遼館跡地の植栽種クロマツの管理は、館の面影を偲ぶことができるので跡地の歴史的景観を意識しながら、みどり摘みやもみあげなど抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とする。

シバの管理は、景観上A、B両ブロックが接しているため、Aブロック同様に芝生管理水準Iレベルとする。

将来、明治期の迎賓館区域が地割として残されること、日本最初の洋式石造建築であることなどから延遼館を復原し、庭園文化の保存と継承の庭園博物館として、広く都民に開放していくことが望ましい。

(iii) Cブロック

家斉時代には中の御門とその周辺が大手門と同様に浜御殿の入口の一つとして利用された。

明治2年(1867)延遼館が竣工した時には、大手門が延遼館への専用の入口として利用されたため、中の御門が庭園への専用の入口として利用されることになり、中の御門と御成御門の間にある大巾員園路とマツの列植及び浜御殿奉行役宅跡等に広場が整備された。

昭和25年(1950)には、野外卓20基が新設さ

れた²³⁾。

現在では、高中木は多い順にタブノキ、トウネズミモチ、アカガシ、低木は多い順にアオキ、ヤツデであり、自然と人為とが複合した状態で樹木が生育している¹¹⁾。

地被の面積で、最も大きいのがシバである¹¹⁾。

このことから、汐留川沿いの自生種型のタブノキやトウネズミモチを主体とした樹林と実生樹木のアオキ、ヤツデ等の樹林管理は、園外周辺部の中高層建築物の緩衝的・防災的・遮蔽的機能を意識しながら、基本的に育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とする。

大巾員園路にある植栽種型のクロマツは、復旧した中の御門から芳梅亭方向への快適な誘導植栽としての機能を発揮できるように意識しながら、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とし、野外卓広場の植栽種型のクロマツの管理は、庭園利用者のために芝生と一体となった景観として親しみがもて、憩うことのできるレクリエーション機能を意識しながら、育成型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とする。

芝生の管理は、管理水準Ⅲレベルとする。

(iv) Dブロック

昭和6年(1931)に、「御銅像の南数株の梅株は往時の梅林²⁴⁾」という中島卯三郎の記述からウメの植栽場所であったことがわかる。

昭和20年代、記録によるとクスノキは「苗木を植えよく生育している²³⁾。」とある。

昭和25年(1950)に、休憩所が新設された²³⁾。

現在、その周辺的高中木は多い順にクスノキ、ヤブツバキ、サンゴジュ、低木は多い順にアオキ、ツツジ類、ヤツデであり、人為的な影響をうけた状態で樹木が生育している。特に、主木ともいえる幹周150cm以上的高中木で、最も多いのが常緑広葉樹のクスノキである¹¹⁾。

地被の面積は、大きい順にハナショウブ、ハラン、シバである。

このことから、植栽種型のクスノキを主体とした実生樹木のアオキ、ヤツデ類等のうち、庚申堂鴨場と内堀の景観との一体感を持たせるように

意識しながら、クスノキ等の高木管理は、枝透し剪定など維持型自然樹形剪定手法等をおこない、アオキ、ヤツデ等低木の管理は、下刈りなど維持型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

植栽種型のウメの管理は、花の観賞を発揮できるようにレクリエーション機能を意識しながら、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とする。

シバの管理は、レクリエーション機能を意識しながら、芝生管理水準Ⅲレベルとし、ハナショウブの管理は、花の観賞機能を発揮できるように意識しながら、都市公園的管理とする。

将来的に花木園は景観的なまとまりがないので、花木園としての機能を十分発揮するようにテーマを明確にし、クスノキやサンゴジュの除去等も含めて再検討することが望ましい。

(v) Eブロック

家斉時代には、内堀区域に長屋や蔵等があった。

昭和23年(1948)にテニスコート5面が新設開場され、その隣には、日比谷公園の花壇を彩ったバラや草花のための花卉栽培場が設けられたが、昭和62年(1987)度には遺跡調査が行われた後、ワイルドフラワーの広場に変わった区域である²³⁾。

現在では、高中木は多い順にタブノキ、トウネズミモチ、クロマツ。低木は多い順にアオキ、キンモクセイ、ヤブツバキであり、人為的な影響をうけた状態で樹木が生育している¹¹⁾。

このことから、周辺の築地川沿いの自生種型のタブノキやトウネズミモチを主体とした樹林と実生樹木のアオキ等樹林の管理は、園外周辺部の中高層建築物の緩衝的・防災的・遮蔽的機能を意識しながら、基本的に育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とし、内堀沿いのそれらの管理は、花木園や庚申堂鴨場の景観との一体感を持たせるよう連携的・調和的機能を意識しながら、実生樹木の除伐、間伐、下刈りなど修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

植栽種型であるクロマツの剪定は、景観植栽としての機能を発揮でき、しかもレクリエーション

機能を意識しながら、育成型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とする。

ワイルドフラワーの管理は、庭園利用者のために景観として親しみがもて、憩うことのできる観賞機能と散策機能を意識しながら都市公園的管理とする。

(vi) Fブロック

家斉時代の内堀区域には長屋や蔵等があった。

昭和62年(1987)度に遺跡調査が行われた後、ボタン園の広場になった区域である²³⁾。

現在では、高中木は多い順にタブノキ、トウネズミモチ、エノキ。低木は多い順にアオキ、トウネズミモチ、ヤツデであり、自然と人為とが複合した状態で樹木が生育している¹¹⁾。

このことから、周辺の築地川沿いにある自生種類のタブノキやトウネズミモチを主体とする樹林や実生樹木のアオキ、ヤツデ等の樹林の管理は、Eブロック同様に園外周辺部の中高層建築物を意識しながら、育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とし、内堀沿いのそれら樹林管理は、庚申堂鴨場の景観との一体感を持たせるように連携的・調和的機能を意識しながら、実生樹木の除伐、間伐、下刈りなどの修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

将来的には、石垣の目地で生長した実生樹木は、石垣の構造等を調査して除去などすることが望ましい。

後退種型のエノキの管理は、日陰地で耐える力が弱く、日当たりの良い土地で生育が良い²⁵⁾こと、林床では稚幼樹の発生がほとんど見られないことなどからも、エノキ周辺の鳥散布型の種子をもつ自生種類のタブノキやトウネズミモチ等常緑樹の増加に伴う競争による自然的影響の軽減を意識しながら、修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

ボタン園の管理は、庭園利用者のために美しい景観として親しみがもて、憩うことのできる観賞的・散策的機能を意識しながら、都市公園的管理とする。

(vii) Gブロック

家斉時代には、船番所等があった。その跡地は水上バス発着所になった区域である。

昭和26年(1951)には、水上バス発着所付近に梅林が設けられ、ウメが100本植栽された⁹⁾。

現在では、高中木は多い順にタブノキ、ウメ、クロマツ。低木は多い順にアオキ、ハギ、ヤツデであり、自然と人為とが複合した状態で高木が生育している¹¹⁾。

地被の面積で、最も大きいのがシバである¹¹⁾。

このことから、周辺の築地川沿いの自生種類のタブノキを主体とした樹林と実生樹木のアオキ、ヤツデ等樹林の管理は、園外周辺部の中高層建築物の緩衝的・防災的・遮蔽的機能を意識しながら、育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とする。庚申堂鴨場沿いの樹林の管理は、庚申堂鴨場の景観との一体感を持たせるように連携的・調和的機能を意識しながら、実生樹木の除伐、間伐、下刈りなど修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

水上バス発着所から正門方向へのルートにある植栽種類のウメやクロマツのうち、ウメの管理は花の観賞を発揮できるようレクリエーション機能を意識しながら、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とする。クロマツの管理は、景観的植栽としての機能を発揮できるよう前景の海と背景の樹林地とのスケールを意識しながら、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とする。

シバの管理は、水上バス発着所から正門方向へのルートの修景を図るために、芝生管理水準Ⅱレベルとする。

(2) Ⅱブロック

(i) aブロック

文政9年(1826)8月、家斉の御台所が観遊した時、それに従った官女花田の記述によれば、御伝橋にはフジ棚があり、潮入りの池の周辺にマツと築山に芝が植栽されて、海への眺望が開けていた。家斉が将軍職を罷めた後の天保13年(1842)3月、日野大納言が勧遊した時、それに従った成島司直図書頭によれば、門から池までの狭く曲がった道

の緑空間は、常盤木（常緑樹）が繁り、潮入りの池周辺には、サクラ、ヤマブキ、カエデ、マツなど、花や新緑、紅葉を楽しむ樹木が植栽されていた¹¹⁾。

八景山からは、中島と小の字島との狭い間隔に植栽された近景、富士山（富士見山）と御亭山のやや広い間隔の中景を通して、奥行きと広がりをもった遠景の江戸湾を眺望でき、池と海の間にマツを配置することにより、池の水と海の水とが一体となり、園外にあるすぐれた海の風景を庭園の景として構成要素に取り入れ、庭のスケールを大きく見せると同時に庭の趣をつくる造園上の「借景」という手法を用いていたといえる¹¹⁾。

明治8年(1875)、木村毅の『浜苑記勝』によれば、八景山にはカエデが多くあったといえる。

現在では、高中木は多い順にクロマツ、タブノキ、エノキ。低木は多い順にアオキ、ヤツデ、タケ・ササ類であり、御成門から潮入りの池へのルートは、植込地の自然と潮入りの池周辺の人為とが複合した状態で高中木が生育している¹¹⁾。特に、池の北岸にある八景山は、保存管理計画の現状と課題として「成長しすぎた株物や、実生木、過密となった樹木類等は、維持管理の中で積極的刈込み、剪定、伐採などを行い、作庭意図に沿った景観の復元に努めている²⁶⁾。」とあるが、八景山から東京湾の海を眺望できるよう、池畔に繁った自生種型のタブノキやアカメガシワなど眺望がきかない樹木の伐採と低木等の地表面からの下刈りが原因となり表土の流亡が見受けられ、池の水が汚れはじめている。

地被の面積で、最も大きいのが潮入りの池周辺のシバである¹¹⁾。

このことから、御成門から潮入りの池へのルートにある自生種型のタブノキや後退種型のエノキを主体としたアオキ、ヤツデ、タケ・ササ類等樹林の管理は、家斉時代の障景技法に基づいて池のほとりに出ると急に明るく開放的な気分を味わうことができるよう意識しながら、維持型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

潮入りの池周辺にある植栽種型クロマツの管

理は、景観的植栽としての機能を発揮できるよう池のスケールを意識しながら、みどり摘み、もみあげなど抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園的管理とする。特に、お伝い橋東北詰めの老マツは、主要景観構成要素として生長の急激な変化を避けるよう段階的な抑制型自然樹形剪定等により公開庭園的管理とする。

将来的には、八景山の池沿いは、高木を利用して枝で園外周辺の建築物の人工感を抑えたり、枝を透かして間接的に見える量を軽減させ、庭園景観との調和を持たせるように意識しながら、表土流亡を防ぐためにカエデ、ヤマブキ、シバ等樹木や地被類を植栽し、伝統的な透し剪定などにより管理することが望ましい。

シバの管理は、景観上から池との一体感を持たせるよう芝生管理水準Ⅱレベルとする。

(ii) bブロック

家斉が将軍職を辞めた後の天保13年(1842)3月、日野大納言が来遊した時、それに従った図書頭成島司直によれば、潮入りの池の北東側の入り口とは反対になる南西側の観音堂から富士山（富士見山）に至る狭い空間も、常盤木で暗くするような手法を用いたといえる¹¹⁾。将軍家唯一の別荘である²⁷⁾この御殿の庭は、江戸時代の常盤木の位置と幹周300cm以上の大径木[図6、表2]の位置とがほぼ合致する。昭和6年当時にはすでにタブノキの巨木がうっそうと繁っていた²⁴⁾ことも考えあわせると、常盤木の主木としてタブノキが植栽されていたといえる¹¹⁾。

現在では、高中木は多い順にタブノキ、アカメガシワ、ヤブツバキ。低木は多い順にアオキ、ヤツデ、タケ・ササ類であり、自然林に近い状態で樹木が生育している¹¹⁾。

地被の面積で、最も大きいのがシバである¹¹⁾。

このことから、観音堂から富士山（富士見山）に至る区域のうち、汐留川沿いの自生種型のタブノキやアカメガシワ¹¹⁾を主体とした樹林の管理は、園外周辺部の中高層建築物の緩衝的・防災的・遮蔽的機能を意識しながら、ある程度放置された自然の状態である育成型樹林管理手法によ

図6 大径木上位15位と幹周300cm以上のタブノキ分布図¹¹⁾ (平成6年・1994)

表2 大径木上位15位表¹¹⁾ (平成6年・1994)

樹種名	幹周	株立数	樹種名	幹周	株立数	樹種名	幹周	株立数
1.クスノキ	585 cm	4本立	5.タブノキ	423 cm	3本立	11.タブノキ	390 cm	
2.トウカエデ	550	5本立	7.タブノキ	420	4本立	12.タブノキ	385	
3.タブノキ	536	5本立	8.エノキ	406		13.タブノキ	382	2本立
4.タブノキ	430		9.エノキ	405		14.タブノキ	380	
5.タブノキ	423		10.タブノキ	393		14.タブノキ	380	

中島の茶屋周辺区域の江戸時代に渡来し紅葉する⁹⁾植栽種型のトウカエデの管理は、保存管理計画によると「中島の北側、橋向うはトウカエデなどの整理¹⁾」とあるが、大径木2位と20位のものがいずれも江戸時代のものといえる¹¹⁾ことから希少性、景観性、レクリエーション性を意識しながら、景観構成要素として育成型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とする。その実生

苗は後継樹としてその一部を保護育成する必要がある。

シバの管理は、景観上からも池との一体性を持たせるように芝生管理水準Ⅱレベルとする。

(iii) cブロック

家斉時代には、松の茶屋と鷹の茶屋があり、江戸時代の庭造書にも記述されているような日本庭園で、主庭の主要景観木としてマツが用いられ

(iii) c ブロック

家斉時代には、松の茶屋と鷹の茶屋があり、江戸時代の庭造書にも記述されているような日本庭園で、主庭の主要景観木としてマツが用いられている¹⁷⁾。また、江戸時代に「植付けた」、「京都名所の松や常盤の松の幹のうねりたる有様いと面白く」²⁴⁾と記述されていることから、潮風に強く、海岸沿いの風景に調和する主要景観樹木としてクロマツが植栽されていたといえる¹¹⁾。

現在では、高中木は多い順にクロマツ、タブノキ、アカガシ。低木は多い順にタケ・ササ類、アオキ、イヌビワであり、人為的な影響をうけた状態で樹木が生育している¹¹⁾。

地被の面積で、最も大きいのがシバである¹¹⁾。

このことから、御成門から潮入りの池へのルートにあるaブロックと、部分的に構成されている自生種型のタブノキを主体としたタケ・ササ類、アオキ等の樹林の管理は、池のほとりに出ると急に明るく開放的な気分を味わうことができるように意識しながら、維持型樹林管理手法により都市公園的管理とする。庚申堂鴨場と部分的に構成されているそれらの管理は、池と鴨場との連続的・調和的な機能を持たせるように意識しながら、除伐・間伐や下刈りなど修景型樹林管理手法等により都市公園的管理とする。また、主要景観樹木として植栽したといえる松の茶屋跡周辺のクロマツの管理は、建物の面影を偲ぶことのできる景観的機能を発揮できるように建物と池のスケールを意識しながら、計画的・段階的に抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とする。

松の茶屋跡周辺のシバの管理は、景観上からも池との一体感を持たせるように芝生管理水準Ⅱレベルとする。

(iv) d ブロック

文政9年(1826)8月、家斉の御台所が観遊した時、それに従った官女花田の記述によれば、潮入りの池の周辺にマツと築山に芝が植栽されて、海への眺望が開けていた¹¹⁾。

天保5年(1834)8月に家斉が観遊した時、それに従った目付土岐頼旨主膳の記述によれば、富士

がみえる築山の裾野にはマツがあった¹¹⁾。

浜離宮時代には、「今見る苑内の海手よりの一葉桜其他の桜は全く観桜会の目的を以て植栽されたものである²⁾。」という史実からも、潮風に強いオオシマザクラが植栽されていたらしい¹¹⁾。

現在では、高中木は多い順にクロマツ、オオシマザクラ、タブノキ。低木は多い順にアオキ、トベラ、オオムラサキツツジであり、人為的な影響をうけた状態で樹木が生育している¹¹⁾。

地被の面積で、最も大きいのがシバである¹¹⁾。

このことから、海沿いの植栽種型のクロマツ¹¹⁾の管理は、八景山や中島の茶屋からみる借景の景観的機能を発揮できるように、潮入りの池と海との連繋や調和を意識しながら、抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とする。

富士見山周辺の植栽種オオシマザクラの管理は、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園型管理とする。

将来的には、富士見山からみる園内の景観を意識しながら、眺望に支障となる植栽種型のオオシマザクラや自生種型のタブノキ等¹¹⁾は移植をし、富士見山の裾野には往時の海辺の庭園を偲ぶことのできる景観を意識しながら、クロマツの補植を検討することが望ましい。

富士見山周辺のシバの管理は、クロマツを主体とした芝生として景観上からも池と海との一体感を持たせ、往時の海辺の庭園を偲ぶことのできるように意識しながら、芝生管理水準Ⅱレベルとする。

(v) e ブロック

前述のように、家斉が將軍職を辞めた後の天保13年(1842)3月、日野大納言が來遊した時、それに従った成島司直図書頭によれば、池泉を回遊することによって、梅の植栽地から御亭山へ、御亭山からの須磨の景色を思わせる塩浜のサクラの植栽、さらに、田舎風の藁葺きの茶屋のサクラの植栽へと、花の色彩美の変化を楽しめるように演出されていたといえる¹¹⁾。

浜離宮時代には、dブロック同様にオオシマザクラが植栽された¹¹⁾。

現在では、高中木は多い順にクロマツ、タブノキ、オオシマザクラ、低木は多い順にアオキ、ヤツデ、オオムラサキツツジであり、人為的な影響を受けた状態で樹木が生育している¹¹⁾。

地被の面積で、最も大きいのがシバである¹¹⁾。

このことから、植栽種型のクロマツの管理は、中島の茶屋から見る潮入りの池と海との間に、dブロックと同様に海沿いのマツに往時の海辺の庭園を偲ぶことのできる景観を意識しながら、抑制型自然樹形剪定等により公開庭園型管理とする。

横堀周辺の自生種型のタブノキの管理は、海沿いのクロマツを主体としたシバの景観を意識しながら、抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とし、将来的には他の場所に移植をする

ことが望ましい。

家斉時代の塩釜や茶屋跡周辺の植栽種型のオオシマザクラの管理は、花の色彩美を楽しむように意識しながら、育成型自然樹形剪定手法等により都市公園型管理とし、眺望に支障となる御亭山下の植栽種型のオオシマザクラ¹¹⁾の管理は御亭山からみる園内の景観を意識しながら、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園型管理とする。[図7]

横堀周辺のシバの管理は、マツを主体とした芝生として景観上からもdとfブロックや池と海との一体性を持たせ往時の海辺の庭園を偲ぶことのできるように意識しながら、芝生管理水準Ⅱレベルとする。

図7 サクラ類の分布図¹¹⁾ (平成6年・1994)

(vi) fブロック

家斉時代には、寛政7年(1795)から同9年(1797)頃と推定される『濱御殿地之繪図』[図8]に横堀や樋ノ口山が描かれており、すでにそれらが存在していたことがわかる⁸⁾。

現在、高中木は多い順にクロマツ、オオシマザクラ、アカマツ。低木は多い順にウバメガシ、ナワシログミ、ツツジ類であり、人為的な影響を受けた状態で樹木が生育している¹¹⁾。

地彼の面積で、最も大きいのがシバである¹¹⁾。

このことから、植栽種型のクロマツの管理は、dやeブロックと一体感を持たせ、海沿いのマツに往時の海辺の庭園を偲ぶことのできる景観を意識しながら、抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とする。また、潮害に弱いといわれている植栽種型のアカマツの管理は、本園の希少な景観構成要素として急激な変化を避けるようにしながら、段階的な抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とする。

横堀周辺にある植栽種オオシマザクラの管理は、育成型自然樹形剪定手法等により都市公園型管理とする。

横堀周辺のシバの管理は、マツを主体にした芝生として景観上からもdとeブロックや池と海との一体感を持たせ、往時の海辺の庭園を偲ぶことのできるように意識しながら、芝生管理水準Ⅱレベルとする。

将来的には、樋ノ口山周辺は、低木等の管理等が原因で、表土の流亡が見受けられるので、それを防ぐためにマツや芝等地被類の植栽することが望ましい。

(3) IIIブロック

(i) Hブロック

家斉時代の『濱御殿地之繪図』によると、植込みなどが少なく田畑やシバなどが多く存する庚申堂鴨場が配置された⁸⁾。

昭和24年(1949)には、鴨場の草焼きをし、建仁寺垣で囲ってバードサンクチャアリとして閉鎖管理をしていたため植生遷移が進行した²³⁾。特に、カワウの排泄物で樹木は枯損し、水質は悪化

の一途をたどり、壊滅寸前の状況となった¹¹⁾。

平成5年度からは、文化財指定時の原状が宮内省時代の姿であること等から、その時代を原状として鴨場の修復工事が進められた¹⁰⁾。

現在では、高中木は多い順にタブノキ、ヤブツバキ、エノキ、低木は多い順にアオキ、ヤツデ、アセビであり、自然林に近い状態で樹木が生育している¹¹⁾。

地彼の無いブロックは、H、Iのみである¹¹⁾。

このことから、鴨場周辺の自生種型のタブノキを主体とした実生樹木のアオキ、ヤツデ等樹林の管理は、往時を偲ぶことのできる庭から林へという景観を意識しながら、カワウの糞により枯損した樹木の除伐、間伐、枝打ちや池畔の実生樹木の下刈りなど修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

将来的には、引き堀周辺の植栽は、田園的要素の強い鴨場¹⁰⁾と潮入りの池周辺とを一体化し、鴨の採食、休息、繁殖などの利用形態を考慮しながら、メヒシバなど草本を主体に植栽し²²⁾、鴨場の公開を実施することが望ましい。

(ii) Iブロック

新銭座鴨場が設置された当時は、引堀と引堀との間に畑や山がありタケが植栽されていた²⁾。

家斉時代には、文政9年(1826)8月、家斉の御台所が観遊した時、それに従った官女花田の記述によれば、新銭座鴨場の池の周辺は草の生い茂る田園の景観を呈しており⁴⁾、鴨の採食、休息、繁殖などに利用されていたと考えられる。

明治30年(1897)には、大規模な模様替えが行われ、引堀にソナレ、モミジ、イブキ、ナンテン、マツ、サザンカ、サツキが植栽された⁷⁾。

昭和24年(1949)には、鴨場の保護のため有刺鉄線柵で囲って立入りを禁止したために植生遷移が進行した²³⁾。

現在では、高中木は多い順にタブノキ、エノキ、シュロ。低木は多い順にタケ・ササ類、アオキ、ヤツデであり、自然林に近い状態で樹木が生育している。特に、昭和54年の船引敏明の調査と平成6年の新銭座鴨場の調査とを比較した場合、ヤ

図8 『濱御殿地之絵図』（東北大学狩野文庫所蔵）にみる庚申堂鴨場周辺⁸⁾

ダケ・ジャノヒゲ群落タブノキ・エノキ・ムクノキ群落（常緑・落葉樹の混交林）に、ヤブツバキ・タブノキ群落タブノキ・エノキ・ムクノキ群落とタブノキ・スダジイ群落（常緑樹優先林）に、それぞれ移行している¹¹⁾。

地被の無いブロックは、H、Iのみである¹¹⁾。

このことから、周辺にある汐留川沿いの自生種型タブノキを主体としたタブノキ・スダジイ群落の管理は、園外周辺部の中高層建築物の緩衝的・防災的・遮蔽的機能を意識しながら、基本的には育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とし、鴨場中央にある島の自生種型タブノキを主体としたそれらの管理は、鳥が休める場を確保するために除伐、間伐、枝打ちなど修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

Cブロックとbブロックに接したタブノキ・エノキ・ムクノキ群落の管理は、往時を偲ぶことのできる庭から林へという景観を意識しながら、除伐、間伐、枝打ちや下刈りなど修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

後退種型のエノキの管理は、エノキ周辺の鳥散布型の種子をもつ自生種型のタブノキ等常緑樹の増加に伴う自然的影響の軽減を意識しながら、稚幼樹の適量管理などの修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

将来的には、新銭座鴨場の引き堀周辺は、庚申堂鴨場の景観と同様に田園的要素の強い鴨場の情景を偲ぶことができるように、鴨の採食、休息、繁殖などの利用形態を考慮しながら、メヒシバなど草本植物を植栽し²²⁾、鴨場の公開を実施することが望ましい。

4、考察

(1) 植物の管理方針

浜離宮恩賜庭園は、昭和23年12月18日文化財保護法により特別名勝、特別史跡に指定され、わが国でも有数の歴史と景観を持つ江戸時代の庭園として認められている。

その理由については、昭和23年12月の指定説明を引用してみたい。

「此の地はもと蘆葦叢生し、将軍家鷹狩の場所であつたが、後ち甲府宰相松平綱重の別邸となり、甲府浜屋敷、海手屋敷と言われた。ついで徳川家宣はこれを収めて浜御殿と改称し、大いに改修を行い、茶屋、仏堂、大手門等を設け景観を整えた。爾来将軍家の別邸となり、鴨場も設けられ園内に織殿、菜園、火薬所、大砲場等も営まれた。

此の間享保年間炎上、一時荒廃したが、家斉は大修理を施して再び茶屋等を設け整備するところがあつた。慶応二年海軍奉行の手に移り、石造洋館の延遼館が建てられたが、維新後は上地され、明治三年に宮内省の移管に属し、爾後浜離宮として大いに苑池を整え、宴遊の地に充てられた。明治天皇は賜宴等に屢々行幸せられ、大正天皇も行幸になつた。明治十二年グランド将軍来朝の際、延遼館を迎賓館に充て、明治天皇が同八月十日中島御茶屋に於て引見せられたことはよく世間に知られている²³⁾。」

上記のような経緯を経て現在に至り、庭園の構成はもとよりのこと、江戸の面影をよく残し、名勝としての価値は高く、江戸の歴史の証となる史跡である。

松平綱重は、兄の徳川4代将軍家綱から下賜された将軍家の鷹狩の場所であつた葦原を埋め立てて御浜屋敷とよぶ別邸をつくり、庭園の造成に伴い植栽がなされたといえる。将軍家の浜御殿の成立時代には、田圃が設けられ、池岸や浜近くにマツが植栽されており、海や山水も眺められる静かな庭の景であつたと推察することができる。

第11代将軍家斉時代には、吉宗時代に焼失した建物などを修復すると共に、新たに各種の茶屋などを設けて種々の催しを行うなど、浜御殿が隆盛を極めた。

時代の変遷とともに地割デザインの改変に伴う植栽構成の変更などや、植物の生育や衰退に伴う植栽、補植など、時間の経過に伴い自然林に遷移する樹林などによっても、植物管理の考え方は当然異なっている。

そこで、変化してやまない植物管理の基本的な考え方として、変化や変貌のなかに歴史的な意義

のあるものもあるので、収集した文献、図面等の資料に基づき時代を設定し、その時代のあるべき姿と現在の植物の生育状況や推移を比較しながら、空間・地割、景観の特性に応じた構成・意匠・樹種・技法・手法を探り、適切な管理をするため、次のように考察することができた。

①管理の時代設定は、現状認識として基本的には家斉時代とし、その時代の意図を把握し、意識しながら管理する。しかし、明治時代の延遼館とその付属の庭のように史資料等が残されておりながら、現代とそぐわない点は、環境的影響、自然的影響および人為的影響を慎重に検討して管理に反映する。

②空間的な管理ゾーンは、作庭意図に基づきⅠブロック、Ⅱブロック、Ⅲブロックの3つのゾーンに大別し、植栽基盤の地割ごとに植栽構成とその推移等を把握した上で各ブロック間の整合を図りながら、それぞれの管理水準や管理手法に従い、景観維持に努めるようにする。

③樹木の管理水準は、公開庭園的管理、都市公園的管理、緑地環境的管理の3つのタイプに分け、芝生の管理水準は、レベルⅠ、レベルⅡ、レベルⅢの3つのタイプに大別し、樹種とその推移の状況を把握した上で優先順位を定め、最小の経費で最大の効果を上げるようにする。

④樹木の剪定手法としては、抑制型自然樹形剪定手法、維持型自然樹形剪定手法、育成型自然樹形剪定手法の3つのタイプに、樹木の集合体である樹林の管理手法としては、修景型樹林管理手法、維持型樹林管理手法、育成型樹林管理手法の3つのタイプに大別し、その他の作業項目の設定、作業頻度、作業適期の策定に努めるようにする。

(2) 植物の管理目標

家斉時代、庭園北側の建物主体の空間をⅠブロックに、次いで、庭園南側の池泉回遊式庭園の空間をⅡブロックに、そして、それらの中間に位置する鴨場及びその周辺の空間をⅢブロックに分けて、管理基準や管理手法について考察する。

(i) Ⅰブロック

家斉時代の植栽構成は、史資料等にその詳細が残されていない。寛政3年(1791)頃の『濱御殿絵図』や天保15年・弘化元年(1884)の『濱御庭内外惣絵図』から見ると庭園構成上、大手門と中の御門の周辺には番所、長屋。内堀に囲まれた区域には蔵、長屋など庭園管理のための建物が設けられており、平成6年(1994)の大径木上位1位のクスノキは明治時代生まれの可能性¹¹⁾から、も特に目立つ区域ではなかったと考えられる。

現在では、A、B、C、F、Gの各ブロックは、自然と人為とが複合した状態で生育している可能性が大きく、D、Eの各ブロックは人為的な影響をうけた状態で樹木が生育しているといえる。

A、Bの各ブロックは、明治2年(1867)延遼館とその附属の庭になり³⁾外交機能の空間として利用された。

明治23年(1890)に延遼館が撤去され、その跡地にはマツと芝生が植栽され、現在は、主要な景観を構成している。

植栽種型のクロマツの管理は館の面影や景観を意識しながら、みどり摘みやもみあげなど抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とし、シバの管理は芝生管理水準Ⅰレベルとして現状を維持する。特に、通称「三百年の松」の管理は、本園の主要な景観構成要素として泥巻き養生なども含め急激な変化を避けるように意識しながら、抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とすることが望ましいと考える。

Cブロックは、延遼館が竣工した時には大手門が延遼館への専用の入口として利用されたため、中の御門が庭園の入口として利用されることになり、中の御門と御成門の間の大巾員園路とマツの列植および広場が整備された。

大巾員園路の植栽種型のクロマツは、快適な誘導植栽としての機能を意識しながら、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とし、野外卓広場の植栽種型のクロマツの管理は、庭園利用者のためにレクリエーション機能を意識しながら、育成型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とする。また、芝生の管理は管理水準Ⅲレベ

ルとする。

A～Cブロック周辺の汐留川沿いの自生種型のタブノキやトウネズミモチを主体とした実生樹木のアオキ、ヤツデ等樹林の管理は、AやBと同様に園外周辺部の中高層建築物を意識しながら、育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とする。

Dブロックは、家斉時代にウメのあった花木園区域で、昭和20年代にはクスノキが植栽された。

植栽種型のクスノキを主体とした実生樹木のアオキ、ヤツデ類等の管理は、庚申堂鴨場と内堀の景観との一体感を持たせために、クスノキの管理を維持型自然樹形剪定手法等により、またアオキやヤツデ等の管理を修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

植栽種型のウメの管理は、花の観賞ができるようにレクリエーション機能を意識しながら、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とする。

シバの管理はレクリエーション機能を意識しながら、芝生管理水準Ⅲレベルとし、ハナショウブの管理は花の観賞機能を発揮できるように都市公園的管理とすることが本園の活用上必須であろう。

E、Fの各ブロックは家斉時代の蔵や長屋等の跡地が、昭和62年度に遺跡調査が行われた後、ワイルドフラワーとボタン園の広場になった。

Eブロックの植栽種型クロマツの管理は、景観植栽としての機能を発揮できるように意識しながら、育成型自然樹形剪定手法により都市公園的管理とする。

Fブロックの後退種型エノキの管理は、エノキ周辺の自生種型のタブノキやトウネズミモチ等常緑広葉樹の増加に伴う自然的影響の軽減を計りながら、修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

E・Fブロックの築地川沿いにある自生種型のタブノキやトウネズミモチを主体としたアオキ等の樹林管理は、A、B、Cの各ブロックと同様に

園外周辺部の中高層建築物を意識しながら、育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とし、また、内堀沿いのそれら管理は、庚申堂鴨場の景観との一体感を持たせるように計りつつ、修景型樹林管理手法等により都市公園的管理とすることが望ましいものとする。

なお、石垣の目地から生長した実生樹木は、石垣の構造等を調査して除去などすることが望ましい。

E・Fブロックのワイルドフラワーやボタン園の管理は、観賞機能と散策機能を意識しながら、都市公園的管理とする。

Gブロックは、家斉時代の船番所等の跡地が、水上バス発着所になり、昭和26年(1951)、その付近にウメが100本植栽された。

ウメの管理は、梅花の観賞やその他のレクリエーション機能を計るために、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とし、クロマツの管理は、前景の海と背景の樹林地とのスケールを意識しながら、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とすることが望ましいと考える。

周辺の築地川沿いの自生種型タブノキを主体とした実生樹木のアオキ、ヤツデ等の樹林の管理は、E、Fの各ブロックと同様に園外周辺部の中高層建築物を意識しながら、育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とし、庚申堂鴨場沿いのそれらの管理は、庚申堂鴨場の景観との一体感を持たせるようにしながら、修景型樹林管理手法等により都市公園的管理とする。

シバの管理は、芝生管理水準Ⅱレベルとする。

したがって、A、B、C、E、F、Gの各ブロックの汐留川や築地川沿いの外周部に自然の状態で生育している樹林の管理は、外部の汐留再開発など中高層建築物による環境の変化への対応と園内の景観との調和を図るために、緩衝的・防災的・遮蔽的機能を意識しながら、育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とする。

(ii) Ⅱブロック

家斉時代には、官女花田の『濱御園の御供の記』や成島司直図書頭の『浦の濱ゆう』の記述によれ

ば、池のほとりのサクラ、ヤマブキ、カエデ、マツやお伝い橋のフジの植栽手法により、緑の樹形美、樹冠美、新緑や紅葉等の葉色美、花の色彩美¹⁷⁾そのものや、水に映る姿の美しさが増すように工夫され、四季や気象による水の色彩美、風によるせせらぎ、波紋や光による投影等水面がもつ多様な表情²⁸⁾や潮の干満による庭趣の変化が、緑と共に美しい景観を構成するように演出されているといえる⁴⁾。

寛政3年(1791)頃の『濱御殿絵図』や天保15年・弘化元年(1884)の『濱御庭内外惣絵図』からも浜御殿の南側には潮入りの池、横堀・鳥溜などの水面があり、それらの池を囲むように築山や茶屋などの施設が設けられ、マツや常盤木が植栽されて、水の美しい景観を引き立たせる背景になる「ついたて」や「アイストップ」¹⁷⁾の手法を用いて水と緑の回遊式庭園の空間がつくられていたといえる。

マツは、潮風に強く、海岸沿いの風景に調和するとともに、樹形が優れ樹姿が整ったクロマツを主要景観樹木として植栽したといえる。

江戸時代の常盤木の主木は、樹種を選定した庭師の経験からしても潜在自然植生であるタブノキの可能性が大きいといえよう。

将軍、皇室及び東京都と所有者が変わっても、南側の池泉回遊式庭園の地割は大きな変化がなかったものといえる。

現在では、a、bの各ブロックは自然林に近い状態で樹木が生育している可能性が大きく、c、d、e、fの各ブロックは人為的な影響を受けた状態で樹木が生育しているといえる。特にd、e、fの各ブロックは開放的な空間で、人為的な管理がされているといえる。

現在、園内での最優先占種としてこの庭園の景観を特徴づけているのは、幹周150cm以上の樹木であり、特にタブノキである。

a、b、cの各ブロックは、家斉時代、御成門から池までの狭く曲がった道の緑空間には、常盤木(常緑樹)を植えて暗くし、奥行きを出す手法を用いたと考えられる。また、西側の観音堂から

富士山(富士見山)に至る狭い園路空間も、常緑樹で暗くするような手法を用い、4番御留杭のある海からの防風や防潮の機能を有するよう海岸植生の代表であるタブノキを植栽したと考えられる。

潮入りの池の周辺にはマツと築山に芝が植栽されて、海への眺望が開けていたといえる。

御成門から潮入りの池へのルートにある自生種型のタブノキを主体としたアオキ、ヤツデ、タケ・ササ類等の樹林の管理は、池のほとりに出たとたん急に明るく開放的な気分を味わうことができるように意識しながら、維持型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

観音堂から富士山(富士見山)に至る区域のタブノキを主体とした樹林の管理は、潮入りの池の景観と連続するような園外周辺部の中高層建築物の緩衝的・防災的・遮蔽的機能を意識し、汐留川沿いは育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とし、池沿いは維持型樹林管理手法により都市公園的管理とすることが望ましいと考える。

潮入りの池周辺の植栽種型のクロマツの管理は、景観的植栽として池周辺のスケールを意識しながら、抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園的管理とする。特に、主要景観樹木として植栽した松の茶屋脇の老松やお伝い橋東北詰めの老松の管理は、主要な景観構成要素として機能を発揮できるように建物と池のスケールを意識しながら、抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園的管理とする。

中島の茶屋周辺区域のトウカエデの管理は、いずれも江戸時代のものといえることから希少性、景観性、レクリエーション性を意識しながら本園の主要な景観要素として育成型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とする。

庚申堂鴨場や新銭座鴨場と部分的に構成されているタブノキを主体としたアオキ、タケ・ササ類等の樹林の管理は、池と鴨場との連続的・調和的な機能を持たせるように意識しながら、修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

潮入りの池の周辺のシバの管理は、芝生管理水

準Ⅱレベルとする。

d、e、fの各ブロックは、家斉時代には、潮入りの池の周辺にマツと築山に芝が植栽されて、園外にあるすぐれた海の風景を庭園の景として取り入れる「借景」という手法を用いていたといえる。また、池泉を回遊することによって、梅の植栽地から御亭山へ、御亭山から須磨の景色を思わせる塩浜のサクラの植栽、さらに、田舎風藁葺きの茶屋のサクラ植栽へと花の色彩美の変化を楽しめるように演出されていたといえる。

浜離宮時代には、観桜会の目的で潮風に強いオオシマザクラが植栽された。

海沿いのマツの管理は、八景山や中島の茶屋からみる借景の景観的機能を発揮でき、海沿いのマツに往時の海辺の庭園を偲ぶことのできるように潮入りの池と海との連繋や調和を計りながら、抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とする。特に、潮害に弱いといわれているアカマツの管理は、急激な変化を避けるように留意しながら、抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とする。

横堀周辺のタブノキの管理は海沿いのクロマツを主体としたシバの景観を意識しながら、抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園型管理とし、将来的には、他の場所に移植することが望ましい。

富士見山周辺のオオシマザクラの管理は、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園型管理とする。

将来的には、富士見山からみる園内の景観を意識しながら、眺望に支障となるオオシマザクラ等を他の場所に移植し、海辺の庭園の景観を意識しながら、マツの補植を検討することが望ましい。
[図7]

家斉時代の塩釜や茶屋周辺のオオシマザクラは、景観構成要素として、花の色彩美を楽しめるようにするため、育成型自然樹形剪定手法等により都市公園型管理とし、眺望に支障となる御亭山下のオオシマザクラの管理は御亭山からみる園内の景観を意識しながら、維持型自然樹形剪定手

法等により都市公園型管理とする。

d～e～f ブロックの富士見山周辺や横堀の海沿いのシバの管理は、マツを主体とした芝生として景観上からも往時の海辺の庭園を偲ぶことのできるように、芝生管理水準Ⅱレベルとする。

(iii) Ⅲブロック

家斉時代には、畑地などが多く存在する庚申堂鴨場と新銭座鴨場が配置され、江戸時代につくられた大名庭園の特徴でもあるレクリエーションのための猟を楽しむ空間がつくられたといえる。

鴨場は幕末になると、荒廃の一途をたどったが、イギリス王子の来朝を機に復活してから終戦まで鴨猟が行われていた。

戦後、東京都の管理になってからは、鴨の捕獲が中止されたため、昭和24年(1949)に有刺鉄線柵や建仁寺垣で囲ったので、樹木も自然状況にまかせていた。

現在、庚申堂鴨場は閉鎖管理をしていたため、植生遷移が進行し、自然林に近いものになっている。

Hブロックは、カワウの排泄物等による二次被害のため樹木は枯損し、水質は悪化の一途をたどり、鴨場環境は荒廃し、衰亡寸前の状態であったが、平成5年度から鴨場の池の浚渫工事、修復工事が始められた。

鴨場の周辺のタブノキを主体としたアオキ、ヤツデ等常緑広葉樹の管理は、往時を偲ぶことのできる庭から林へという景観を意識しながら、修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

将来的には、引き堀周辺は、鴨の採食、休息、繁殖などの利用形態を考慮しながらメヒシバなど草本を植栽し、鴨場を公開することが望ましい。

Iブロックは、江戸期の田園風の景観でもなく、明治・大正期の鴨場としての景観でもない自然林に近いものになっており、模様替えて大きな樹木が失われたことを考えると、現在の自然林に近いものは、模様替え後の百余年の間に生じたものといえる。

汐留川沿いのタブノキを主体としたタブノキ・スダジイ群落の管理は、園外周辺部の中高層

図3 植物の管理目標

ブロック	樹種型	樹種	樹木管理水準			自然樹形剪定手法			樹林管理手法			芝生管理水準		
			公開庭園	都市公園	緑地環境	抑制型	維持型	育成型	修景型	維持型	育成型	レベルⅠ	レベルⅡ	レベルⅢ
I ブ ロ ッ ク	A	自生種			●						●			
		植栽種	●			●								
		植栽種	●			●								
		地被類										○		
	B	自生種			●						●			
		植栽種	●			●								
		地被類										○		
	C	自生種			●						●			
		植栽種		●			●	●						
		地被類												○
	D	植栽種		●			●							
		自生種		●						●				
		植栽種		●			●							
		地被類												○
	E	植栽種		●				●						
		自生種		●	●				●		●			
	F	後退種		●					●					
		自生種		●	●				●		●			
	G	植栽種		●			●							
		自生種		●	●				●		●			
		植栽種		●			●							
		地被類											○	
II ブ ロ ッ ク	a	植栽種	●			●								
		自生種		●						●				
		地被類											○	
	b	自生種		●	●					●	●			
		植栽種		●				●						
		地被類											○	
	c	植栽種	●			●								
		自生種		●					●	●				
		地被類											○	
	d	植栽種	●			●								
		植栽種		●			●							
		地被類											○	
	e	植栽種	●			●								
		植栽種		●			●	●						
		自生種	●			●								
		地被類											○	
	f	植栽種	●			●								
		植栽種	●			●								
		植栽種		●				●						
		地被類											○	
III ブ ロ ッ ク	H	自生種		●					●					
	I	自生種		●	●				●		●			
		後退種		●					●					

建築物の緩衝的植栽を意識しながら、育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とする。また、鴨場中央の島のタブノキを主体としたタブノキ・スダジイ群落の管理は、鳥が休める場を確保するように意識しながら、修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

Cブロックとbブロックに接したタブノキを主体としたタブノキ・エノキ群落の管理は、往時を偲ぶことのできる庭から林へという景観を意識しながら、修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

スカイラインを構成しているエノキの管理は、エノキ周辺の鳥散布型の種子をもつタブノキ等常緑広葉樹の増加に伴う自然的影響の軽減を計りながら、修景型樹林管理手法により都市公園的管理とする。

将来的には、新銭座鴨場の引き堀周辺は、庚申堂鴨場の景観と同様に田園的要素の強い鴨場として、当時の情景を偲ぶことができるよう、鴨の採食、休息、繁殖などを考慮しながら、メヒシバなど草本を植栽し、鴨場を公開すべきである。

このことから、Ⅰ～Ⅲのすべてのブロックについてみると、景観構成要素としての樹木のうち、Aブロックの三百年の松の管理は、維持型自然樹形剪定手法等により公開庭園的管理とし、A・Bブロックの延遼館跡地やa・c・d・fブロックの池周辺のクロマツの管理は、抑制型自然樹形剪定手法等により公開庭園的管理とし、bブロックのトウカエデやeブロックのサクラの管理は、育成型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とし、D・Gブロックのウメの管理は、維持型自然樹形剪定手法等により都市公園的管理とすることが望ましいと考える。

Ⅰ～Ⅲのすべてのブロックの外周部についてみると、b～Ⅰ～C～B～A～E～F～Gブロックの外周部は、園外周辺部の中高層建築物の緩衝的・防災的・遮蔽的機能を意識しながら、育成型樹林管理手法により緑地環境的管理とし、d～e～fブロックの海側は、池と海との一体性を持たせ、往時の海辺の庭園を偲ぶことのできるように留意しな

がら、芝生管理水準レベルⅡ型の管理とする。

Ⅱブロックのすべての水面沿いの芝生の管理は、水面の広がりや池沿いの景観を眺めることができるように、芝生管理水準レベルⅡ型の管理とする。

以上のことからこの研究では、[表3]のように、樹木の管理水準を、公開庭園的管理、都市公園的管理、緑地環境的管理の3つのタイプに大別することができた。

さらに、[表3]のように、樹木の剪定手法は、抑制型自然樹形剪定手法、維持型自然樹形剪定手法、育成型自然樹形剪定手法の3つのタイプに大別することができた。

樹木の集合体である樹林の管理手法は、[表3]のように、育成型樹林管理手法、維持型樹林管理手法、修景型樹林管理手法の3つのタイプに大別することができた。

また、[表3]のように、芝生の管理水準は、レベルⅠ、レベルⅡ、レベルⅢの3つのタイプに大別することができた。

引用文献・参考文献

- 1) 浜御殿遺跡調査会『浜御殿遺跡』1～5、1988
- 2) 中島卯三郎『濱離宮と其庭園に就て』造園研究第2輯、61～86、1931
- 3) 東京都・日本造園学会『浜離宮恩賜庭園環境調査-庚申堂鴨場とその周辺水景の調査』2～20、1994
- 4) 中島宏『浜御殿の植栽構成に関する史的考察』日本庭園学会誌No11、1～15、2003
- 5) 東京都公園緑地部管理課保存文書『濱離宮沿革』1～24
- 6) 東京都・日本造園学会『浜離宮庭園歴史的環境調査-庚申堂鴨場周辺-』31～143、1995
- 7) 東京都・東京都公園協会『浜離宮庭園新銭座鴨場修復調査報告書』3～34、1994
- 8) 東京都・日本造園学会『浜離宮庭園歴史的環境調査その4』125～160、1998
- 9) 小杉雄三『浜離宮庭園』36～91、東京都公園協会、1981

- 10) 中島宏・石塚達雄「都立文化財庭園の復活計画と浜離宮恩賜庭園庚申堂鴨場の修復について」都市公園、126、5～29、1994
- 11) 中島宏「浜御殿の植栽推移に関する考察」日本庭園学会誌No10、11～32、2002
- 12) 都市緑化基金『浜離宮恩賜庭園生態調査報告書』1～525、1984
- 13) 東京都・東京都公園協会『浜離宮庭園生態調査樹木調書』1～741、1995
- 14) 金井利彦『東京の老樹名木』88～91、東京都公園協会、1981
- 15) 桜井信夫『自然教育園』49～51、東京都公園協会、1981
- 16) 亀山章『小石川後樂園の植生』（応用植物社会学研究10）19～38、1981
- 17) 中島宏『改訂植栽の設計・施工・管理』96～103、170～175、269～271、463～568、経済調査会、1992
- 18) 東京都公園緑地部計画課『平成6年度自然環境調査の概要』（緑化に関する調査報告）23、94～112、1995
- 19) 飯泉茂・菊地多賀夫『植物群落とその生活』33～53、東海大学出版部、1980
- 20) 宮脇昭『緑の証言』199～204、東京書籍、1938
- 21) 中島宏「東京都における文化財庭園の管理について」都市公園108、10～18、1990
- 22) 中島宏『緑化・植栽マニュアル』375～440、506～513、経済調査会、2004
- 23) 東京都公園協会『浜離宮の10年のあゆみ』4-17、31-36、59-63、1955
- 24) 中島卯三郎『濱離宮と其庭園に就て』造園研究第3輯、52～88、1931
- 25) 北村文雄他『都市樹木大図鑑』44～465、講談社、1982
- 26) 東京都公園緑地部『東京都における文化財庭園の保存管理計画書』1—15、23—35、93-94、2004
- 27) 中島卯三郎『濱離宮と其庭園に就て』造園研究第4輯、28～42、1932
- 28) 中島宏『水の庭』9～11、立風書房、1976